

第78回原子力委員会定例会議議事録（案）

1. 日 時 1997年12月9日（火）10:30～11:45

2. 場 所 委員会会議室

3. 出席者 伊原委員長代理、田畑委員、藤家委員、依田委員
新法人作業部会 鈴木部会長（東京大学教授）
（事務局等）今村審議官、林政策課長
伊藤原子力調査室長
池本専門委員
土屋核燃料課長
原子力局 奈良
核燃料課 片岡、峯尾
動力炉開発課 河田
原子力調査室 松澤、新井、宗

4. 議 題

- （1）新法人作業部会中間報告について
- （2）国際プルトニウム指針の公表について
- （3）原子力政策円卓会議出席者有志との会談結果について
- （4）その他

5. 配布資料

- 資料1-1 改革案の作成に当たっての基本的枠組み
資料1-2 新法人作業部会中間報告 - 新法人の基本構想 -
資料2 国際プルトニウム指針の公表について
資料3 円卓会議出席者有志との会談結果について
資料4 第77回原子力委員会臨時会議議事録（案）

6. 審議事項

（1）議事録の確認

事務局作成の資料4第77回原子力委員会臨時会議議事録（案）が、一部修正のうえ、了承された。

（2）新法人作業部会中間報告について

議題の件について、新法人作業部会部会長である鈴木東京大学教授より、資料1-1及び資料1-2に基づき、新法人の使命、改革の目的、動燃改革検討委員会報告書を受けた作業部会の検討内容及び新法人の基本構想等について説明があった。

これに対し、委員より、

- ・動燃改革には、動燃の当事者能力というものと意識の問題が関連するが、内容を幅広く詰めていただいた
- ・新法人と外部との関係が重要。例えば、共同研究、人事交流等を通じて、新法人に対するインプットの仕組みを作るとか、新法人からのアウトプット、スピノフを活用する仕組みを作ることが必要
- ・人事交流、技術移転等については、今までも仕組みはあったが、うまく運用されておらず関係機関全体で考えるべき課題。この場合、日本的「ムラ」社会を抜け出るのは、我が国においては困難な課題であるが、重要な問題

- ・ 短期間でこれだけの内容をよくまとめていただいた。「かくあるべき」という理念を、現実を踏まえて検討いただいたものとの印象。改革は単に動燃の問題ではなく、原子力界がこの苦境を跳ね返すべきモーティブ・フォースをどこに求めていくかということが重要。全体を俯瞰しながら原子力開発の理念の再構築を目指したい
- ・ 新法人スタートの必要条件としての枠組みができた。いかに「魂」をいれていくかが重要

等の意見があった。

これに対し、鈴木部会長より、

- ・ 原子力委員会においては、成果の技術移転、他機関との円滑な人材交流や、連携等の面での検討をお願いしたい
- ・ 新法人は、社会の状況変化に対応、順応できるものでないと世論の支持が得られないということをよく認識することが重要

等の発言があった。

(3) 国際プルトニウム指針の公表について

標記の件について、事務局より資料2に基づき、目的、経緯、指針のポイント及び公表の手順について報告があった。

これに対し、委員より、

- ・ 本指針は、プルトニウム利用の国際的透明性の向上やプルトニウムの平和利用に対する内外の理解促進に貢献することが期待される
- ・ プルトニウム利用の平和利用の枠組みの強化に期待

等の意見があった。

(4) 原子力政策円卓会議出席者有志との会談結果について

標記の件について、事務局より資料3に基づき、会議の概要等について報告があった。

これに対し、委員より、

- ・ 申し入れの内容は十分受け賜った。申し入れにあるように新円卓会議の人選を、推進派、反対派、中立派という色分けすることは適当ではない
- ・ 新円卓会議の検討にあたっては、賛成、反対という観点ではなく、エネルギーや環境等の問題について、客観的データを用意し、これを国民に判断材料として提示していくのも一案

等の意見があった。